

平成 28 年度の文化財研修と文化財講演会について

小暮伸之・和田伸哉

福島県文化財センター白河館（まほろん）では、文化財保護の充実・強化と文化財の保全・活用等を促進する目的で、市町村や団体等の職員や教職員等を対象とする文化財研修を実施している。福島県内においては、東日本大震災等による被災文化財等の保全対応が喫緊の課題となっているため、研修の受講対象者については、各市町村の文化財保護審議会委員、文化財保護団体、文化財ボランティア、文化財教育に関わる教員・学生等も含め、文化財保護の担い手拡大に努めることとしている。平成 28 年度の文化財研修は、「基礎研修」、「専門研修」と、多面的要望に応えるために臨時に館内や館外で行う「特別研修」に区分して実施した。

また、文化財への理解と関心を深めることを目的とする文化財講演会を、毎年定期的に行っている。平成 28 年度は、館長講演会を 5 回、企画展示等の内容に関連する講演会を 4 回、福島県文化財センター白河館が立地する白河市の文化財に関する講演会を 1 回実施した。

以下に、平成 28 年度に実施した研修・講演会業務の日程・内容等を列記する。

1 研修業務

① 基礎研修（文化財保護に必要な基礎知識を学ぶ研修）

○考古資料基礎研修「縄文時代早期の土器群について」（平成 28 年 5 月 1 日）

講師：三浦武司（まほろん職員）他

○文化財保護・活用基礎研修「被災資料の保全・記録実習」（平成 28 年 6 月 18 日）

講師：中尾真梨子（（公財）福島県文化振興財団）

○教職員等発掘調査体験研修（平成 28 年 8 月 3 日～5 日） 場所：須賀川市高木遺跡

講師：小暮伸之・和田伸哉（まほろん職員）

○無形の文化財研修「職人のワザを後世に伝えるために」（平成 28 年 12 月 17 日）

講師：大山孝正（まほろん職員）

○地方史研修「史実検証の手法—神指城と直江状の検討をもとに—」（平成 29 年 2 月 25 日）

講師：本間 宏（まほろん職員）

② 専門研修（文化財保護に必要な専門的知識と技術習得のための研修）

○文化財と関連科学研修「最新技術による出土品分析法」（平成 28 年 7 月 16 日）

講師：片岡太郎（弘前大学）

○文化財保護・活用専門研修「史料保全・記録実習」（平成 28 年 9 月 10 日）

講師：阿部浩一（福島大学）・徳竹 剛（福島大学）

○文化財保護指導者研修会（平成 28 年 10 月 13 日・14 日） 場所：大安場史跡公園

講師：白水 智（中央学院大学）・懸田弘訓（民俗芸能学会福島調査団）・三瓶秀文（富岡町教育委員会）他

- 考古学専門研修「弥生土器研究の諸課題」（平成 28 年 11 月 19 日）
講師：滝沢規朗（新潟県教育庁文化行政課）
- ③ 特別研修（市町村等の要望に対応し、臨時的に行う研修）
 - 福島県立図書館 まほろん移動展関連講座「縄文土器の年代—ススとコゲからなぞをとく—」（平成 28 年 6 月 19 日） 講師：三浦武司（まほろん職員）
 - 泉崎村成人学級講話「白河郡の平安時代について」（平成 28 年 8 月 26 日）
講師：笠井崇吉（まほろん職員） 場所：泉崎村中央公民館
 - 平田村 文化財防火デー「平田村における近年の発掘成果」（平成 29 年 1 月 24 日）
講師：佐藤 啓（まほろん職員） 場所：平田村 中倉第 1 集会所
 - 古殿町 歴史教室「福島県内の中・近世城郭について」（平成 29 年 3 月 22 日）
講師：佐藤 啓（まほろん職員） 場所：古殿町公民館

2 講演会業務

- ① 館長講演会 講師：菊地徹夫（福島県文化財センター白河館館長）
- 第 1 回「君の故郷に弥生はあるか？—日本人と北の考古学—」（平成 28 年 5 月 21 日）
- 第 2 回「北日本に人はどう住み始めたか？—旧石器時代から縄文時代前半期—」
(平成 28 年 7 月 16 日)
- 第 3 回「北日本の縄文時代後半期から続縄文期」（平成 28 年 9 月 17 日）
- 第 4 回「北日本の民族文化はどう形づくられたか？—続縄文・北大式土器文化・擦文・オホツク文化—」（平成 28 年 11 月 12 日）
- 第 5 回「謎のオホツク人とアイヌ文化」（平成 29 年 2 月 4 日）
- ② 文化財講演会等
 - 「震災遺産と文化財を考える」（平成 28 年 6 月 5 日）
講師：白井哲哉（筑波大学）・高橋 満（福島県立博物館）
 - 「白河郡衙遺跡群について」（平成 28 年 8 月 28 日）
講師：鈴木 功（白河市建設部都市政策室）
 - 開館 15 周年記念講演会・シンポジウム 第 1 回 城跡を掘る I 「城跡研究のいま」
(平成 28 年 10 月 29・30 日) 講師：竹井英文（東北学院大学）他、資料編参照
 - 開館 15 周年記念講演会・シンポジウム 第 2 回 城跡を掘る II 「近世城郭の展開」
(平成 28 年 12 月 3・4 日) 講師：平田禎文（三春町歴史民俗資料館）他、資料編参照
 - 文化財講座「古代ふくしまの歴史的画期—大化の革新から郡（評）家の成立へ—」
(平成 29 年 1 月 15 日) 講師：安田 稔（（公財）福島県文化振興財団）

以下では、平成 28 年度に実施した研修・講演会の中から、(1) 文化財講演会「震災遺産と文化財を考える」、(2) 文化財保護指導者研修会、(3) 開館 15 周年記念講演会・シンポジウム「城跡を掘る I ・ II 」について、それぞれの講義の内容を中心に報告する。なお、(3) については、当日配布資料を「資料編」として別に付した。

3 平成 28 年度に実施した主な研修・講演会の報告

(1) 文化財講演会「震災遺産と文化財を考える」

同講演会は、「震災遺産」を後世に伝える意義、保存・活用の視点について考えることと、震災の物的証拠である「震災遺産」が、歴史の証人である「文化財」と同様の意味を持つことを再認識すること等をテーマにして実施した。同じ趣旨で開催した、ふくしま復興展『震災遺産と文化財』の関連企画である。

① 概要

当講演会は、ふくしま震災遺産保全プロジェクト実行委員会と（公財）福島県文化振興財団の共同企画で、ふくしま復興展『震災遺産と文化財』の会期中の平成 28 年 6 月 5 日（日）に、福島県文化財センター白河館講堂を会場にして実施した。

② 内容

2 名の講師による講演と、質疑応答が行われた。まず、ふくしま震災遺産保全プロジェクト実行委員会事務局の高橋満氏（福島県立博物館主任学芸員）による「震災遺構・震災遺物と文化財」は、約 5 年前の東日本大震災が産み出した震災遺産（震災が産み出した様々なモノや記憶）が、時を経るにつれて、どんどん消滅している現状を踏まえ、これを震災という歴史が存在した証拠として保全し、将来的に歴史資料として活かすため、今何をすべきかという問題を提起した内容であった。具体的には、平成 27 年に福島県立博物館を中心とする 8 団体で設立された「ふくしま震災遺産保全プロジェクト」の取り組みを中心とした説明が行われた。

震災遺産としては、広野町の宮田条里遺跡における津波堆積物の断面転写標本の作成、南相馬市の県道 391 号における津波で曲がった路面、浪江町の鈴木新聞店における店内に残された新聞束、富岡町の富岡駅前における郵便ポスト、富岡町の文化交流センター「学びの森」における災害対策本部跡等を例示し、調査状況の説明がスライドで行われた。

震災遺産を目に見える形として残すために、「ふくしま震災遺産保全プロジェクト」では、考古学の記録方法である写真撮影、実測図作成等を有効に活用していることも報告された。

引き続き行われた、白井哲哉氏（筑波大学図書館情報メディア系教授）による「被災資料を救う、震災資料を残す—茨城と福島（双葉町）での経験から—」では、災害発生時の前後で、被災資料と災害資料に区分し得ることを示し、それぞれに見合った保存方法が解説された。

被災資料としては、東日本大震災の茨城県北茨城市平潟における水損資料の復旧・修復作業が紹介された。レスキュー活動の状況、資料の水損状況、搬出作業、カビの発生状況、エタノール水溶液処理、真空凍結乾燥作業の状況がスライドで示された。復旧・修復作業を終えた資料からは、既存の市町村史には記録がなかった、平潟地区の旧家における近代以降の水産加工業の歴史が明らかになるという、大きな成果も得られている。

災害資料の説明としては、原子力災害により、埼玉県内に役場機能を移転させていた、福島県双葉町の事例が取り上げられた。避難所となつた「さいたまスーパーアリーナ」と「旧騎西

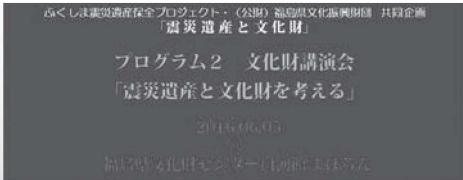
高校」の事例を紹介しながら、詳細な写真撮影によって記録を残す手法の説明が行われた。また、避難所に寄せられた千羽鶴も、書き込まれたメッセージ等から、双葉町に縁を感じた人々によって送られたものであること、具体的な応援者がわかるという意味で、貴重な歴史資料として保護すべき対象となりうることが示された。

③ まとめ

今回の講演会で、高橋氏は、考古学的視点でいう遺構・遺物の集合体である「遺跡」が、ほぼ「震災遺産」と同義であるという整理を行い、震災遺産の保全に取り組んできた経緯と、特にその視点等を紹介した。一方、日本近世史を専門とする白井氏は、被災資料・災害資料という形で、災害発生以前のものと、発生以降のものを保全することの意味を説明した。講演会開催の時点で、東日本大震災発生からは約 5 年 3 ヶ月を経過していたが、福島第一原子力発電所の事故の影響もあって、災害は、なお進行形の状態にあった。加えて、新たな災害が国内で次々に起こっている中で、次の世代、100 年後、1000 年後の人々に何を残し、どう伝えていくのか、というテーマは、文化財・歴史資料を今後に残していく意味合いと、全く相通じるものであり、両氏の講義は、こうした観点からの事例報告であった。

2 名の講師の講演が終了したあと、活発な質疑応答が行われた。その中では、高橋・白井両氏らが独自に集めた資料だけではなく、携帯電話・デジタルカメラ・スマートフォン等を使って、様々な人々が独自に残した写真・映像・画像等の資料を残していくための方策に関わる課題が提起された。

災害の教訓と事実を後世に伝える証拠物件を保存し、復興・創世の姿を世界に発信することは、本県の重要な役割と考えられる。その証拠物件は、やがて重要な文化財となりうることが認識された講演会であった。



講演1

「震災遺構・震災遺物と文化財」

福島県立博物館 主任学芸員 高橋 満
ふくしま震災遺産保全プロジェクト事務局GM

1 高橋氏スライド (抜粋 1)

(1)あの日から今日までの福島県

-この5年3ヶ月の福島県 →非日常の出現と継続
東北地方太平洋沖地震とともに伴う津波は福島県内に甚大な被害をもたらし、そして原発事故も引き起こしている。以来県内には多量の瓦礫が生じ、仮設住宅や放射能汚染物質の集積など震災前は想定していなかった非日常の景観も産み出している。
同時に「除染」「スクリーニング」「全町避難」「内部被曝」「ベクレル」など聞いたこともない言葉が飛び交う社会にも出現させた。
本来あるべきだった生活への回復力が機能せず、別な局面を受け入れざるを得ない日常、このような非日常の出現と継続そして定着が福島県の現状となっている。

01.ふくしま震災遺産保全プロジェクトとは

3 高橋氏スライド (抜粋 3)

(3)博物館の果たすべき役割

博物館にできることは何か?
一福島県立博物館の震災対応
(1)平成23年(2011)～ 文化財レスキュー事業
(2)平成24年(2012)～ 「はま・なか・あい文化連携プロジェクト」

◎震災の経験を共有するために、継承するためには、
博物館は何をするのがよいのだろうか?
(3)平成26年(2014)～ 「ふくしま震災遺産保全プロジェクト」
●震災の発生から3年後
●震災の資料化

01.ふくしま震災遺産保全プロジェクトとは

5 高橋氏スライド (抜粋 5)



7 講義中の高橋 満氏

本日お話させていただく内容

01. ふくしま震災遺産保全プロジェクトとは

- ・震災遺産とは何か?
- ・プロジェクトの考え方・枠組み

02. 保全活動と考古学的視点

- ・震災遺産の調査実例
- ・考古学的視点・手法

03. まとめにかえて

- ・震災遺産と文化財
- ・震災遺構保存について



震災遺構・震災遺物と文化財

2 高橋氏スライド (抜粋 2)

(2)震災遺産とは何か

震災遺産：震災が産み出したモノや震災を示すモノ



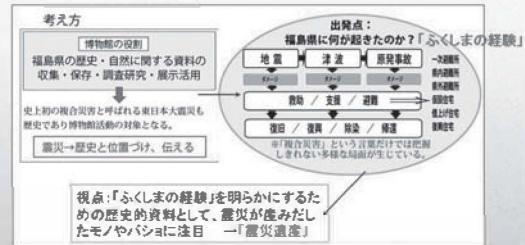
◎震災遺産の類型◎

- ①地盤・津波の痕跡
(地割れ・断層・津波堆積物など)
- ②被災物つまり震災によって壊れたものや機能を失ったもの
(瓦礫・被災遺物)
- ③震災の対応として生じたものや震説
(仮設住宅・フレコンパックの集積)
- ④被災していないもの
→震災で本来の意味を失ったもの

01.ふくしま震災遺産保全プロジェクトとは

4 高橋氏スライド (抜粋 4)

(4)プロジェクトの考え方



01.ふくしま震災遺産保全プロジェクトとは

6 高橋氏スライド (抜粋 6)



8 会場の様子

震災遺産と文化財を考える（1）

被災資料を救う、震災資料を残す —茨城と福島(双葉町)での経験から—

茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク副代表
筑波大学 白井哲哉

ふくしま震災遺産保全プロジェクト・(公)福島県文化振興財団
「震災遺産と文化財」
文化財講演会「震災遺産と文化財を考える」

福島県文化財センターまほろん 2016年6月5日(日)

1 白井氏スライド (抜粋1)

はじめに —大災害から貴重な記録を守る

- 9月18日(金) - 20日(日)
茨城史料ネットが被災古文書に対するレスキュー活動
- 9月21日(月・祝)
茨城史料ネットの記事が茨城新聞に掲載
→記事を読んだ地元の地方史研究者が、市役所の歴史的公文書の危機を各方面へ通報
→茨城地方史研究会、県立歴史館へ連絡が届く
→県立歴史館が常総市役所訪問(夕方)、現状調査実施
→県立歴史館から茨城史料ネットへ連絡が届く(夜)
- 9月25日(金)
県立歴史館、茨城史料ネット、国文学研究資料館が常総市役所を訪問、レスキュー事前打ち合わせ

3 白井氏スライド (抜粋3)

おわりに

☆今日の話で取り上げた資料

- 市役所の行政文書
- 土蔵から出てきた古い木箱
- 避難所に送られた千羽鶴
- これらすべてが「有形の文化的所産で我が国にとって歴史上又は芸術上価値の高いもの並びに考古資料及びその他の学術上価値の高い歴史資料」の一つと評価できる（文化財保護法第2条）
→私たちは、これらが「貴重な国民的財産であることを自覚し、これを公共のために大切に保存するとともに、できるだけこれを公開する等その文化的活用に努めなければならない。」（同法第4条）

5 白井氏スライド (抜粋5)



7 講義中の白井哲哉氏

震災遺産と文化財を考える (2)

はじめに —大災害から貴重な記録を守る

☆「平成27年9月関東・東北豪雨」に伴う鬼怒川氾濫被災地で実施された、茨城県常総市役所が保有する歴史的公文書等に対するレスキュー活動について

• 2015年9月7日(月)台風18号発生

9日(水)東海地方上陸、温帯低気圧へ
10日(木)日光市今市で朝までの24h
降水量541mm
12時50分鬼怒川決壊
市役所庁舎は36h冠水(約1m)

2 白井氏スライド (抜粋2)

被災資料と災害資料

○災害の発生と資料の区分

＜両者は一体ではないが、地域復興の観点から不可分の意義をもつ＞

災害の発生時

←過去	災害資料	災害資料	未来→
・災害の発生以前に存在した文化財等(歴史資料、生活資料)、文書記録や各種資料	・災害の発生後に收受・作成された文書記録などの各種資料や電磁的記録		
→救出・保全・修復・保存、利用・普及へ	→収集・保全・修復・保存、利用・普及へ		
※博物館、文書館が活動	※図書館、博物館、大学等が活動		
※口頭伝承の採訪もあり			

4 白井氏スライド (抜粋4)

おわりに

・被災した資料や災害に関わる資料は“負の遺産”と考える人もいると思われる

→今後同じ被害に遭わないため、同じ過ちを犯さないために、事実を伝える(絶対に忘れさせない)のは私たちの責務

→それらの資料は、私たちが気づかなかつた多くのことがらを教えてくれる

だから、
できるだけ大事にしましょう。



＜終＞

6 白井氏スライド (抜粋6)



8 質疑応答の様子

(2) 文化財保護指導者研修会

文化財保護指導者研修会は、市町村の文化財保護活動において指導的立場にある文化財保護審議会委員や指導員等の方々を対象に、県内の文化財保護行政の現状と課題、および文化財の保護対策等をテーマに、毎年会場を変えて行っている行事である。平成28年度は、福島県教育委員会・郡山市教育委員会・(公財)郡山市文化・学び振興公社の共催を得て、平成28年10月13・14日(木・金)の2日間にわたり、郡山市の大安場史跡公園を会場にして実施した。県内17市町村から、のべ150名の参加者があった。

① 研修会の概要

1日目の10月13日には、中央学院大学教授の白水智氏による「人口2,000人の村の文化財保全」、福島県富岡町教育委員会の三瓶秀文氏による「富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチームの活動」、福島県教育庁文化財課の芳賀友則氏による「平成28年度福島県の文化財保護行政の現状」、郡山市教育委員会の国分俊徹氏による『未来を拓いた「一本の水路』』の4つの講義が行われた。2日目の10月14日には、元民俗芸能学会福島調査団の懸田弘訓氏による「民俗芸能の継承の実例と課題」、(公財)郡山市文化・学び振興公社の押山雄三氏による「大安場古墳の保存活用」の2つの講義を行った後、国指定史跡大安場古墳の見学会が行われた。

② 講義：懸田弘訓氏「民俗芸能の継承の実例と課題」

今回の研修会で講師を依頼した懸田弘訓氏は、昭和12年(1937)、伊達市靈山町の出身で、福島県教育委員会文化課、県立博物館学芸課長、県立川口高等学校長等を経て、福島県文化財保護審議会委員、会津大学非常勤講師、二本松市教育委員会委員長等の要職を歴任した。また、ラジオ福島パーソナリティーとしても活躍している。福島県の伝統行事や民俗芸能の調査研究における第一人者で、県内の伝統芸能関係者からの信頼は極めて厚い。特に、東日本大震災と原子力災害に際しては、民俗芸能学会福島調査団の団長として、被災地に寄り添い、献身的にその復興再生に尽力し、平成27年(2015)5月には特定非営利活動法人「民俗芸能を継承するふくしまの会」を組織して、その副理事長として活動を継続している。また、当研修会の前日には、県の文化功労賞の受賞が新聞報道された。

懸田氏は講義の冒頭で、まず、近年の民俗芸能継承が困難になっている大きな要因として、民俗芸能の背後にある信仰心が希薄になってきていること、少子高齢化が進んだことによる若者の減少が、担い手不足に拍車をかけていることの二点を指摘した。その他の要因としては、若者の興味や趣味の多様化、指導者の高齢化と権威の低下、共同体の一員としての意識の低下、農家で兼業が増加したことによる休日の不統一、用具類の価格上昇による経費の増大等の諸点をあげ、これらが東日本大震災を契機に、一気に噴出して、今日の危機的状況を招いていると語った。もともと担い手不足が深刻化していたところに、東日本大震災による被害が追い打ちをかける格好になったと言える。特に被害の大きかった浜通り地方を中心に、全県的に憂慮される状況が続いており、懸田氏も「県内の民俗芸能の被災数」を示したスライドを使い、震災

後は、実に約 6 割に及ぶ団体が、民俗芸能継承の危機に瀕していることを報告した。

こうした状況の中、懸田氏は、身内の人人が亡くなても、その数ヶ月後、次の年には、地域の祭りを再開したという事例に幾つも出くわしたこと、その奥に存在する「想い」と「意義」を感じ取れたことが、今日まで復興再生活動を継続するきっかけになったこと等、現在の心境を交えながら述懐されていた。そのうえで、民俗芸能の復興再生には、「衣食住が揃っているだけでは、人間は生きられない」ということを再自覚させる意義があると主張した。また、そのためには、①民俗芸能の背後にある根強い信仰心と精神を取り戻すこと、特に浜通り地方においては、古来からの漁民の信仰と海に対する信頼・感謝の気持ちを取り戻すこと、②郷里への愛着と強固な連帯意識を再認識すること、③亡くなった方への感謝と慰霊の気持ちを持つこと、④祭りや芸能は郷里そのものであると認識し、生きる場でもあるという自覚を持つこと等の諸点が、原動力になると述べた。このことを証明する史実として、江戸時代中期の天明 2 年(1782)に発生した「天明の飢饉」において、震災から復興する際の人々の心の支えとなつたのが、「獅子神楽」とその後に伝來した「田植踊」であったことを例示し、なお、今日的には国の補助による被害実態の把握、国・県教育委員会・各種団体による資金補助と各種支援が肝要であるという現実も合わせて説明した。

今後の民俗芸能継承のための対策については、懸田氏が県内各地を調査した結果と、氏自身の実感を通して説明された。①継承者の年齢幅を広げること、②女性の参加を促すこと、③兄弟・姉妹での参加を促すこと、④親子の協力を図ること、⑤後継者の地域を広げること、⑥避難者が避難先の芸能に参加すること、⑦保存会のあり方を工夫すること、⑧継承システムを確立すること、⑨地域・学校との連携・協力を図ること等が、具体的な方策になり得ることを、調査時のスナップ写真、エピソード等を交えて熱弁された。

最後に再び、祭りを中心とした民俗芸能の意義を、「無病息災や豊作祈願等を願う信仰」としてよりも、「地域共同体を維持するための核、絆を深めるための手段」として捉え直し、そこから生じる思いやり、いたわり、助け合い等の心、共通理解、団結心等が、地域づくりの根幹になるという提言を行つて講義を終了した。

③ まとめ

震災後、実際に現地に赴き、精力的に調査した懸田氏の言葉は一つ一つが重く、参加者すべての心に、響くものがあった。映写されたスナップ写真にまつわるエピソードのなかには、被災時の悲惨な状況、家族の苦難に満ちた人生等、正視しがたい、過酷な内容の話もあった。既述のように、懸田氏の調査手法は、被災者に寄り添うもので、誰にでも同じようにできるものではないからこそ貴重である。震災の記憶が急速に薄れていく中、こうした調査方法自体の継承こそが重要な課題であることを認識させられる内容であった。

(3) 開館 15 周年記念講演会・シンポジウム「城跡を掘る I ・ II」

このシンポジウムは、当館 15 周年記念指定文化財展「城跡の考古学」の関連企画として開催した。第 1 回は、10 月 29・30 日に、城跡を掘る I 「城跡研究のいま」と題し、第 2 回は、12 月 3・4 日に、城跡を掘る II 「近世城郭の展開」と題し、のべ 4 日間に亘って実施した。県内各市町村の文化財担当者を始めとした、城郭研究に精通した方々 14 名を講師に招いた。

① 概要

第 1 回「城跡研究のいま」では、豊臣秀吉の「奥羽仕置」にともない福島の城づくりがどのように変化したのか、近年の発掘調査成果を基に報告が行われた。討論では、石積みの起源と変遷、本城と支城の格差等について議論され、奥羽における織豊系城郭の要点が、改めて整理された。

第 2 回「近世城郭の展開」では、考古学における「城館」の概念や幕藩体制下における城郭の成立と、城下町の展開等について、発掘調査成果に基づく報告がなされた。討論では、標準的な城下町である会津若松城下とその他の城下との違い等を中心に意見が交わされた。

以下に、当日の日程と掲載する。なお、講演会・シンポジウムの当日配布資料は、別に資料編に掲載した。



写真 1 「城跡研究のいま」の様子



写真 2 「近世城郭の展開」の様子

② 内容

第 1 回 城跡を掘る I 「城跡研究のいま」

〈第 1 日〉 10 月 29 日（土）

13：00～13：05 開会挨拶・趣旨説明

13：05～14：15 講演「城郭研究の現在」

講師：竹井 英文 氏（東北学院大学）

14：25～15：35 講演「奥羽仕置の実像」

講師：高橋 充 氏（福島県立博物館）

15：35～16：45 講演「陸奥南部の織豊系城郭」

講師：垣内 和孝 氏（郡山市文化・学び振興公社）

〈第2日〉 10月30日（日）

- 10：00～10：45 講演「梁川城跡—守護所から織豊系城郭へ—」
講師：今野賀章氏（伊達市教育委員会）
- 10：45～11：30 講演「柏木城跡—蘆名氏による境目の城—」
講師：布尾和史氏（北塙原村教育委員会）
- 11：45～12：15 講演「向羽黒山城跡—謎の巨大山城—」
講師：梶原圭介氏（会津美里町教育委員会）
- 13：00～13：30 講演「木村館跡—城破りの風景—」
講師：松本茂（（公財）福島県文化振興財団）
- 13：30～14：15 講演「若松城と神指城—蒲生氏・上杉氏の拠点—」
講師：近藤真佐夫氏（会津若松市教育委員会）
- 14：15～15：15 講演「久川城と鳴山城—支城の実像と情報伝達—」
講師：佐藤啓（（公財）福島県文化振興財団）
- 15：25～16：40 討論
進行：高橋充氏
本間宏（（公財）福島県文化振興財団）
コメンテーター：竹井英文氏
垣内和孝氏

第2回 城跡を掘るⅡ 「近世城郭の展開」

〈第1日〉 12月3日（土）

- 13：00～13：05 開会挨拶・趣旨説明
- 13：05～14：25 講演「城館の考古学」
講師：飯村均（（公財）福島県文化振興財団）
- 14：35～16：00 講演「城と城下町の近世への展開」
講師：平田禎文氏（三春町歴史民俗資料館）

〈第2日〉 12月4日（日）

- 10：00～11：00 講演「二本松城跡—戦国城郭から藩庁へ—」
講師：佐藤真由美氏（二本松市教育委員会）
- 11：10～12：10 講演「棚倉城跡—赤館城から棚倉城への機能移転—」
講師：藤田直一氏（棚倉町教育委員会）
- 13：00～14：20 講演「白川城から小峰城へ—道・町・城の変遷—」
講師：鈴木一寿氏（白河市建設部都市政策室文化財課）
- 14：30～15：50 討論
進行：平田禎文氏
飯村均